

国際交流基金助成事業報告書

大阪薬科大学 薬学部薬学科 4年次生 山口 万穂

・はじめに

この度、私は国際交流基金の助成を受けて、海外の大学の薬学部留学生として、薬学や医療について学ぶこと、さらに多くの人と交流を持ち、異文化に触れることを目的とし、平成27年2月4日（水）から平成27年2月28日（土）までの期間、平成27年2月10日（火）に大阪薬科大学と学術交流協定が締結されたタイ国・シーナカリンウィロート大学を訪問しました。

1. シーナカリンウィロート大学について

シーナカリンウィロート大学は、ふたつのキャンパスがあり、薬学部はナコンナヨックキャンパスにありました。ナコンナヨックは、タイの首都バンコクから約1時間離れたところにあります。薬学部は、製薬植物学や生薬、医薬品化学、生物薬剤学、製薬技術、臨床薬学、社会・行政薬学の6部門あります。学部プログラムは、博士の学位のための6年間のコースです。専攻は、*pharmaceutical sciences* と *pharmaceutical care* のふたつに分かれています。学生は6年生の時に、専門的な訓練（実習）を行います。*pharmaceutical sciences* は製薬会社で、*pharmaceutical care* は、病院や薬局で実習を行います。



2. 寮での生活について

タイに滞在中、私は大学の寮に入らせてもらいました。寮は、大学から歩いて10分ほどのところにあります。近くには、食堂やレストラン、コンビニ、屋台があり、とても便利でした。寮の部屋は、現地の学生と5人部屋でした。4人の学生は、薬学部の2年生でした。はじめの一週間は、とにかく生活に慣れるのに必死でした。わからないことが多い上に、日本語が通じない状態であるため、使い慣れない英語を用いながら、お風呂のこと、洗濯のこと、食事のことなどたく



さん質問しました。すると、みんなも私が何を伝えようとしているのかを理解しようとしてくれ、英語で答えてくれました。慣れない地に来た私に親切にしてくれ、また、姉のように接してくれたことは、私にとってとても嬉しいことであり心強いものでした。残りの3週間は、少しでも現地の子とたくさん話したいと思い、大学から帰宅し寝るまで、いろんな話をしたり、タイ語を教えてもらったりと交流を深めました。時には大学の授業が終わると、バトミントンやランニングをしに行きました。現地の学生と同じ生活を体験できたのは、とても良い経験となりました。

また、現地の学生は、全員寮で生活し土日になると、実家に帰省します。3回あった土日のうちの2回はホームステイを経験しました。1つ目のホームステイ先は、4人家族のお宅でした。お寺や水上マーケットなど観光名所に連れてってもらい、日本では見ることの出来ないものをたくさん見ることが出来ました。2つ目のホームステイ先は、漁師のお宅でした。海に近く、マングローブもあり、海のうえにあるお寺を見に行きました。また、タイ料理を教えてもらいました。

タイで生活する上で、一番驚いたことは、シャワーが水しか出なかったことです。その理由を尋ねてみると、タイの気候が暖かいからだと言っていました。タイでの生活は、日本と同じところもあれば異なるところもあり、異文化に触れることが出来ました。

3. 医療機関への訪問

私は、2つの病院（Abhaibahubate Hospital、Ongkharak Hospital）と大学の付属薬局（SWU durgstore）を訪問させていただきました。また、Home Health Care といって、日本における在宅サービスと同じようなものに参加させていただきました。

・ Abhaibahubate Hospital

この病院は、Herble Medicine というタイの伝統的な薬を用いる伝統的な治療法を行う病院です。ここには、Herble Medicine を専門とする医師や薬剤師がいます。医師は、患者一人一人の症状にあった Herble Medicine の量や組み合わせの処方箋（レシピ）を作り、処方します。そして、薬剤師が、その処方箋を見て、天秤を用いて Herble Medicine を量り取っていました。蛇や亀の甲羅など、日本の生薬学では見たことがないものからチョウジなど日本でも見たことのあるものまでありました。やはり、タイは日本と異なった気候であるため、用いる生薬も異なってくるのだと思いました。



・ Ongkharak Hospital

この病院は、医師5名、薬剤師3名、病床数60床、個室が4部屋ありました。外来患者数は120人/日です。

外来患者は受付後、まず、看護師により血液検査や血圧測定などの検査を受けます。その後、診察室に入り、医師の診察を受け、薬剤部にて薬を受け取ります。薬剤部では、患者から処方箋を受け取ると、アシスタントが薬を取りそろえて薬剤師が監査を行い、薬を交付します。新患者には、服薬指導を行います。慢性疾患の患者で、前と同じ薬が処方されている患者には服薬指導を行わないそうです。薬剤部の窓口は、薬剤師と患者の高さが同じで、コミュニケーションが取りやすいようになっています。このような構造になっているのは、この病院だけだそうです。



病床数は60床ですが、毎日だいたい35人の患者が入院しており、全部は埋まっているとのことでした。入院患者への薬の交付方法は、薬剤師が薬を取りそろえカートにいれ、看護師にカートを手渡し、看護師が患者に薬を渡します。薬剤師は人数が少ないため、患者に副作用の症状が出た時に薬のチェックを行うだけだそうです。



• SWU drugstore

薬局には、風邪の人や腹痛を訴える人など軽症の患者が訪れます。薬剤師が症状を聞き出して、それにあつた薬を選択し提供します。日本の調剤薬局においてあるような薬も、タイでは処方箋なしで買えてしまうので、薬が簡単に手に入る反面、危険でもあると思いました。そして、薬剤師の役割が重要になってくると思いました。薬局は、とても入りやすい雰囲気、薬剤師に相談しやすい環境でした。



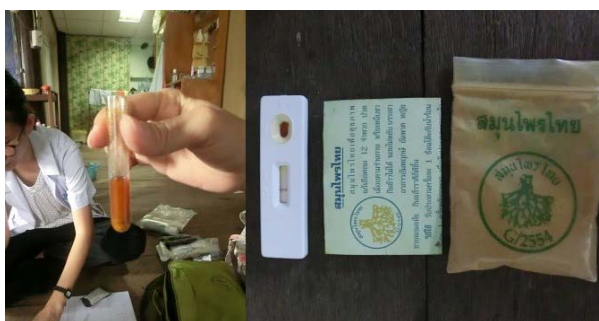
• Home Health Care

2日間参加させていただきました。大学の薬剤師の先生と Ongkharak Hospital に行き、看護師とセラピストと合流し、PCU に向かいました。PCU とは、Primary Care Unit といって、村にあり病院から遠くに住んでいて病院に行けない人が、病院の代わりに利用します。月に2回だけ医師が来て診察します。基本的には、看護師のみが常時います。PCU で、その日に行く家の患者のカルテを受け取り、家を回ります。2日間とも3人の患者の家に行きました。看護師が、家族歴や症状を聞き、病気の状態を確認します。セラピストは、寝たきりの人の筋肉が弱くならないようにマッサージをしたり、筋肉の状態を確認します。薬剤師は、患者が持っている薬を確認し、服薬指導を行います。

ある患者は、90歳女性で20年以上高血圧と高コレステロール血症を患っていました。薬は、自分で管理し、1回服用分を作っていました。また、伝統的な薬が好きということもあり、自分で購入し服用していました。薬剤師の先生は、彼女のために1回服用分を作ってあげ、私も手伝わせてもらいました。また、患者が購入していた薬が処方されている薬と飲み合わせが悪くないかの確認も行っていました。



ステロイドは、副作用が多いので服用には注意しなくてはなりません。しかし、患者が購入した薬にステロイドが入っているか分からないので、ステロイド確認テストも行いました。このテストは、液体もしくは、固形を溶かした液をたらし、陽性であれば、デキサメタゾンやプレニゾロンが含まれていることがわかります。



4. 授業について

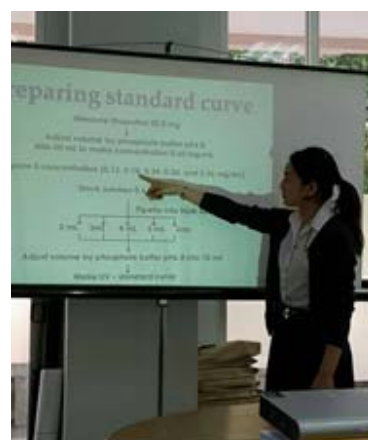
授業は、さまざまな学年の学生に混ざり、薬用植物学や製剤学、生理学、注射剤のアンプル・バイアル作りの実習、英語の授業に参加させていただきました。また、special project として製剤設計学に因んだテーマを与えられ、研究も行いました。

英語の授業では、実際に海外の企業の方を招いて、英語での面接練習を行いました。まず、面接の練習日までに英語の履歴書を作成しました。日本でも就活の履歴書は書いたことがなかったので、非常に戸惑いました。しかし、自分が将来何になりたいのか、自分の長所や短所は何かなど、自分を見つめなおす良い機会となりました。面接の練習では、志望動機を聞かれました。こうだからですと、伝えたくても語彙力がなく、伝えられないもどかしさを味わいました。また、志望動機がまだ弱く、面接官の心に伝えられなかったと感じました。

注射剤のバイアル・アンプル作りでは、まず、大学でこうしたことが学べることに驚きました。バイアル・アンプルは、実習のときに用いたことはありましたが、作ったことはなかったので、実際に作ってみることが出来て、良い経験となりました。この授業では、生徒が、この授業ではどんなことをしているのかを説明してくれました。現地の学生は、薬学専門用語を英語でいうのを簡単にこなしていました。私は、薬学専門用語を英語でなんて言うのかを全然知らないのと、とても恥ずかしい気持ちになりました。現地の学生に教科書を見せてもらおうと、専門用語は必ず英語で表記してありました。日本の教科書にも、専門用語には英語の表記が入っているといいなと思いました。

生理学の授業では、人体模型を用いて人体の臓器の名称と場所を学習する項目で、先生に臓器の日本名称を生徒に教えてあげて欲しいと言われたので、4つのグループに、ホワイトボードを用いて、発音をしながら教えました。自分の発音の仕方が合っているのが少し不安でしたが、みんな興味を持ってくれ、他人に教えるという喜びを感じました。

Special project では、イブプロフェンの錠剤・粉末、イブプロフェン含有医薬品2つ、イブプロフェン含有製剤を用いて、溶出試験を行い、溶出挙動の比較を行いました。また、研究室に配属される前だったので、とても戸惑いました。検量線の作成方法、excelでのデータ解析など私にとってはじめてなことばかりでした。英語で説明されることを理解し実験するのは、難しかったです。また、自分の思いを英語で伝えてもなかなか伝わらなかった時や失敗してやり直すことになった時は、挫けそうになりました。しかし、院生の方が一緒に実験をしてくれ、また友達が様子を見に来てくれたので、なんとか、実験を終わらせることが出来ました。最後に、先生方の前で研究報告をしました。



5. おわりに

今回の短期留学を通して、私は、自分を見つめ直し、視野を広げることができました。

現地の薬学生と時間を共にし、みんなの意識の高さに刺激を受けました。ある子は、英語を話せるようになりたいと、参加自由の英語の授業に参加していました。ある子は、海外で活躍できる人になりたいと、海外のインターンシップに参加していました。このようにタイの学生は、意識を高く持ち将来を見据えていました。私は、日本で生活している今の自分に満足してしまっていたのですが、これではダメだと強く感じました。将来自分は何になりたいのか、やりたいことは何か、今の自分に足りないものは何かを見つめ直し、そのために、自分は何をするのか、何をやりたいのかを考えさせられました。



また、自分の英語力の無さを痛感しました。伝えたいことがあるのに、なかなか言葉が出てこないなど、もどかしさを常に感じていました。日本にいと、普段英語は使わないので、英語の必要性を低く捉えてしまいます。しかし、英語は世界共通語です。日常会話はもちろん、薬学の勉強をしていても、英語がわからなければ、外国人に伝えることも理解することも出来ません。自分の想いや知識を伝えるには英語は欠かせないと思い、もっと勉強しなければいけないと改めて思いました。

新しい友人に出会い、異文化に触れられた事は、私にとって大きな転機となりました。今後、実務実習やインターンシップに参加し、就活の時期を迎えます。今回の短期留学を通して感じたことを忘れず、毎日一步一步成長していきたいと思います。最後になりましたが、今回戸塚教授のご支援、また、国際交流基金の助成により、このような貴重な機会を設けていただいたこと、大変光栄に思います。ありがとうございました。